愛しのパンツを
追いかけて
異世界に
迷いこんだ
俺に浮気を
させるな！

物心ついたときから、俺はどんなパンツをはいても、しっくりこなかった。

絞めつけが強いと尻が痒くなるし、緩いと前のおさまりがつかず心もとない。
ほかにも細かいことに文句をつければきりがなく、そりゃあ、百点満点のパンツは中々見つからず。

「これじゃない感」を持て余しながら、肌にあうパンツを探しつづけて二十年以上。
男性下着メーカーに就職してまで追い求めた結果、ついにジャストフ

イットのパンツとの出会いが。

それがTバック。
ただしオーダーメイドのだ。

まえからTバックが理想に近くはあった。
「尻を布でおおわれたくない」「まえは最低限の布で包まれて、ずれが気にならないていどの絞めつけを」などの基本的な要求を満たしていたから。

「あとちょっと」で理想に辿りつきそうでつかなかったのが、絞めつけ具合や形の微調整、布やゴムの素材選びを徹底的にこだわりぬいてオーダーメイドしたことで完成。

いや、オーダーメイドという発想は前々からあったとはいえ、さすがに「俺、男だしなあ」と気が引けて。
が、男性下着メーカーに就職をしたらオーダーメイドをするのは新人教育の一環だったし、先輩曰く「下着をつくって販売する会社の人間としてのたしなみだから」と。

会社の後押しがあり、おかげで長年のパンツによる悩みや鬱屈が解消され、世界が一変、光り輝いて見えるように。
「これからこそ本当の人生がはじまる！」と奮い立ったほど、心機一転で社会を歩んでいこうとしたのだが。

会社終わりにジムのプールで時間を忘れて泳ぎまくり。
更衣室にいくとがらんどうで時計を見たなら閉館の十五分前。

「いつもは三十分前にアナウンスが鳴るのに！」と水着を脱ぎ、パンツをはこうとした、そのとき。

慌てたせいで落としたパンツが、風に吹かれるように飛んでいった。空調がきいているとはいえ、パンツを飛ばすほどでなし。

釣り糸で引っぱられるように、どんどん遠ざかっていくのに、すぐさまタオルを腰に巻き「ドッキリ！いやでも、なんで俺に！？」とパニックになりつつ追走。

といって所詮はパンツだ。

「関係者以外立ち入り禁止」と書かれたドアが行く手を阻み、早くも逃走劇は終了。

そのはずが、ドアが開いて悠悠と浮遊していくパンツ。
だれもいないし、ご丁寧に閉められたのを俺は手で開けたから、自動でもないし。

そうして、どんどんドアを開けて施設の奥へと。
「このジム、こんな奥行きあったか！？」と息を切らしながらも足を緩めず、諦めようとも思わず。

この世で一つしかない俺と相思相愛の究極のパンツだ。
予備が五枚あるといっても、初めて足を通した記念すべき一枚なのだから、できれば死ぬまで添い遂げたい。

裸にタオルを巻いただけで全力疾走する俺は通報レベルなれど、かまわずパンツにまっしぐら。

また扉が開いたかと思えば、これまでとちがって白く発光して向こう側が見えず。
パンツが吸いこまれた白い光に、迷わず跳びこんだなら、勢いをつけすぎたせいでつまずき、すってんころりん。

すこし転がって、見あげたそこは真っ青な空に広大な草原。
今は夜だし、ジムはビル群の中にあるはずが。

呆気にとられて空を眺めていると、人のざわめきが聞こえて、振りむいたところ。
人の群れがなにかを崇めて拝んでいるようで、その視線を辿れば、なんと俺のパンツが。

後光が差しているようにきらめきながら宙に浮いたまま静止。

「お、おおおお俺のパンツーーーーー！」